

アフリカの人々と名付け 20

靈魂、名前、親族——「同名」の政治学

小馬 徹

「祖先の再来」の觀念と同名者

ケニアのキプシギスでは、生後間もなく、男性なら父方の祖父かその〔同母〕兄弟の、女性なら父方の祖母かその僚妻（co-wife、つまり祖父の別の妻）、または父方の祖父の兄弟の妻の名前を貰う——女性は婚入した氏族に編入される。これを祖靈名と言う。父方の祖先の靈魂が胎児に再来しなければ胎児は生命を授からないとされる。つまり、祖靈名は先祖から父系の子孫へと順次受け継がれ、氏族の内部で閉鎖的に循環することになる。

キプシギス人は、祖靈名を貰った祖先と性格や身体的な特徴を一にするとする。かつて日本人や西欧人が「血」の連続性の概念で説明し、近代科学が遺伝子の概念で説明するものを、彼らは「靈魂の再来」という一層強い形で説明するのだ。例えば、或る老人に呪詛されて不幸に見舞われ、しかも許しを乞う前にその老人が死んでしまったとしよう。この場合、老人の靈魂が父系の孫に再来するのを待って、その赤ん坊に許しを乞わなければ、不幸は取り除けないとされている。

それにもかかわらず、氏族や家の内部に特定の名前が代々伝えられてはいない。それは、他にも複数の幼名やいくつもの渾名などがあり、そのいずれで世間に知られるか一定しないからである——それらは氏族や家に固有の名前ではない。祖靈名で一般に知られるようになる可能性は、むしろ低いと言える。

だから、キプシギスでは同名者（「名に属する者」）は少なくない。父系の孫たちが同じ祖靈名を貰うことさえある。この場合にも、同名者が特別な関係にあると觀念される事はなく、この事実は、「靈魂の再来」の觀念と

矛盾している。それゆえ、往々学校出の若者の中にはこの觀念を否定して、名前は名前に過ぎないと主張する者がいる。彼らは、この觀念こそが氏族や支氏族の理念を背後から支持しており、いわば「同名者の政治学」になっていると薄々気付いているのである。

イヌイットと同名者関係

名前と靈魂を同一視したり、その靈魂を個人の属性と結び付けて考えるのはアフリカ人に限らない。よく似た発想がカナダのイヌイット人の間でも見られる事が知られている。

彼らは、個々の名前には不滅の「名前の靈魂」（name soul）が宿っており、持ち主が死んで肉体を離れると次の住居を探すと言う。名付けとは、新生児に「名前の靈魂」を付与する事である。同名者は、互いに「骨」とか「一つの物の片方」と呼び合う気の置けない特別の間柄（「冗談関係」）になる。イヌイットは苗字を持たないが、誕生時に幾つもの名前を与えられるから、このネットワークは幾重にも錯綜し合い、親族関係とならんで重要な相互扶助的な社会関係を構成している。しかも、名前に性別はなく、異性に因む名前を貰う事も少なくない。この場合、成人するまでの間、新生児は異性として育てられるのである〔岸上伸啓「カナダ・イヌイットの名前、名前の靈魂と社会変化」『北海道教育大学紀要』〔第1部B〕46(2), 1996〕。

岸上は、「一人の個人が複数の名前を持つということは、一人の人間が複数のアイデンティティと社会的人格を持つことを意味する」とし、個人は対人関係を勘案して個々の状況での振る舞いを決定すると言う〔前掲

書]。だが、子供が男女いずれかの性しか生きられず、また成人後は自然の性を選択する事実を見れば、「名前の靈魂」の觀念には、矛盾が孕まれている。つまり、そこには、キプシギスとは別の「名前の政治学」が介在しているのだ。

クン・ブッシュマンの同名関係

自然環境は対照的だが、やはり狩猟採集生活を営んできたカラハリ砂漠のクン・ブッシュマンの間にも類似の觀念が見られる。彼らは、バンドと呼ばれる恒常性の低い多数の小集団ごとに移動生活を送る。長男は父方の祖父、長女は父方の祖母、他の子供たちは母方の祖父母やその兄弟姉妹の名前を貰う。こうして、ごく限られた数の名前が世代間を循環し、同名者は某かの同一性を持つとされている。彼らは家族の誰かと同名の者に出会うと、「父さん」、「兄さん」などと親族名称でその人と呼ぶ。この結果、通婚し合う地域には、互いに親族名称で呼び合う多重なネットワークが形成される。親族名称の使用はそれに相応しい行動を伴い、あらゆる場面で調和的な行動を導くので、数多くのバンドを超えた単一の集団意識が醸成されている。こうして、通婚圏内の人々は自分たちを「我々自身」と呼んでいる [Marshall L., "The !kung Bushman of the Kalahari Desert", in J.L. Gibbs, Jr. (ed.) *Peoples of Africa*, 1965]。

同名関係と親族関係

ブッシュマンやイヌイトのように過酷な自然環境で移動しながら狩猟（採集）生活を送る人々の間では、集団構造はごく単純なものにならざるを得ない。相互扶助のために、それを補うあらゆる関係性が想定され、動員される可能性が高い。彼らの間で同名者関係が重視される理由の一端はここにあるだろう。

マーシャルは、クン人の上のようなネットワークに親族関係の源初的な形態、つまり

マードックが考えた「域族」(deme) [Murdock, G.P., *Social Structure*, 1949]のような、内婚的地域集団を見ようとしている——ただし、クン人が内婚規制のように権威に結び付く構造的集団化の意識をもっていないと断っているが [Marshall, *ibid.*]。

この点で興味深いのは、ザンビアのロズィ人の「出自の名」である。ロズィでは村が土地保有単位であり、村人の多くは親族関係にあるが、単系氏族（父系または母系の一方だけの系譜を辿る人々の集団）を構成することはない。彼らは、父系・母系を問わず全ての先祖の系列を辿って「出自の名」(descent name) に言及する。人々は八つの「出自の名」を持つというが、実際には近くに住んで共同関係にある人々の「出自の名」を二、三知っているだけだ。「出自の名」を共にする人々が集団を構成しているとは思えないが、互いに親族だという感情を抱く [Gluckman, M., "Kinship and Marriage among the Lozi of Northern Rhodesia and Zulu of Natal", in A.R. Radcliffe-Brown and Daryll Forde *African Systems of Kinship and Marriage*, 1950]。

ロズィ人は氏族を持たず、庶民が辿れる系譜深度は三、四代と浅いので、誰かと同じ「出自の名」を持つからといって同じ系譜に族するとは思えない。ただ、「出自の名」は先祖の全ての系に——理論的には過去の全てのロズィ人に——及び得る。だから、あらゆる道筋を辿って特定の親族に自分の系譜を結び付けようとするが、無系の通例として父系を重視する傾向があり、時には女性を男性、また母方の叔父を父親とみなす。彼らは、こうして人々を村という実際の土地保有単位に巧みに結び付けているのだ [Gluckman, *ibid.*]。

既に述べた通り、名付けには特定の対象を認定して指示する事と、同一の範疇として括る事の両面がある。括る作用の一端は同名の政治学として姿を現し、社会を動かすのだ。

(こんま とおる 神奈川大学社会人類学)